被爆地広島を訪れた観光客の皆さんは、どんな「ヒロシマ土産」を、どんな思いで買うのでしょうか。

海外から訪れる人も増えています。中国新聞ジュニアライターは、平和記念公園に来ていた外国人観光客にインタビューし、どんなものが欲しいのか聞いてみました。何が売れ、どんなグッズが新たに生まれているのかも探りました。

お土産を誰かにあげれば、ヒロシマで感じた思いを相手に伝えることができます。単なる商品ではなく平和を発信する重要な役割を果たしているのではないかと思いました。

△ピース・シーズ△
平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「ピース・シーズ」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため中学、高校生21人でテーマを考え、取材し、執筆しています。

第64号　ヒロシマ土産 何を買う？

持ち帰って 平和願う心

平和公園で外国人に聞いてみました

「折り鶴の現物欲しい」声多く

平和記念公園を訪れた外国人に、どんなお土産を手に入れたいかをジュニアライター6人で聞きました。10カ国の15人・組が協力してくれました。

カナダ、米国、メキシコ、オーストラリア、ニュージーランド、ロシア、シンガポール、カタール、フランス、ハンガリーの人たちです。最も多かったのは折り鶴の現物が欲しいという人たちで、4人・組いました。

その理由は「平和の象徴だから」や「平和を促進するのに大切だから」などでした。使い道は「人に渡してヒロシマでの経験を伝えたい」や「いつでも見られる重要な場所に置く」など。佐々木禎子さんと折り鶴のイメージが、世界に広がっていることをうかがわせます。

折り鶴は平和記念公園を訪れる人たちが作ってくるものだと思っていました。しかし被爆地を訪れる外国人にとっては持ち帰りたいものなのかもしれません。ヒロシマを思い起こさせる「リマインダー」の役割も果たしているのでしょう。

「買った本を人にあげ、核兵器による恐怖を共有したい」「原爆ドームの置物を通し、悲劇だけでなく復興を諦めない気持ちを伝えたい」といった意見もありました。また同じものでも、人によって持つ意味が変わることが分かりました。（高3岡田実優、池田穂乃花、高2平田佳子、鬼頭里歩、中2林田愛由、岡島由奈）

原爆資料館ミュージアムショップでよく売れるもの（2017年度）

取り扱いは230種類

原爆資料館のミュージアムショップには連日、たくさんの来館者が訪れます。広島平和文化センターが運営し、本やＤＶＤ、Ｔシャツなど約230種類を扱っています。2017年度の１番人気は「折り紙」で、折り鶴に関係したものがよく売れました。

同センターがショップを引き継いだ1983年度は図書や絵はがきなどが売られていました。その後、品物の種類が広がりました。最近は折り鶴の再生紙を使った商品も増えています。同センター総務課の伊藤彰紀課長補佐（47）は「帰ってから土産を見て資料館を見学したことを思い出し、平和への思いをはせてほしい」と話します。

06年からは館内にポストが置かれ、ショップで買ったはがきを原爆慰霊碑などの消印を付けて家族や友人に送ることもできます。本人が平和への思いを深めるのはもちろん、受け取る人へも平和のメッセージを伝えられると思いました。（高１目黒美貴）

新ブランドも生まれてます

手にした人を優しい気持ちに

「アース・ヒロシマ」手掛ける牛来さんに聞く

広島県内の製造業者とデザイナーが連携し、平和への願いを込めた土産物のブランド「アース・ヒロシマ」があります。このブランドを手掛けるソアラサービス（広島市中区）の社長、牛来千鶴さん(55)から話を聞きました。

アース・ヒロシマの商品を手に平和への思いを語る牛来さん

きっかけは30代の時に目にした8月6日の平和記念式典の様子でした。多くの人が平和を祈る姿に衝撃を受けました。一方で、平和記念公園の外は買い物をする人たちでにぎわっていて「その境界線をなくしたい」と考えたのです。

ブランド展開を始めたのは2016年です。商品はプラスチック製の折り鶴キーホルダーやイヤリング、折り鶴のイラストをあしらった熊野化粧筆など30種類以上。手に取りたくなるようなかわいいものばかりです。

被爆2世でもある牛来さんは「手にした人が優しい気持ちになり、普段の生活の中で平和のことを思い出すきっかけにしてほしい」と商品への思いを話していました。土産物は平和を発信する一つの方法だと思いました。「記念に」と買い求めるのではなく、込められた思いを感じ取ることが大切です。（高3池田穂乃花、中2岡島由奈）

ヒロシマ土産の原点は

「ヒロシマ土産」の原点は故吉川清さんかもしれません。原爆ドームの近くで1951年から、絵はがきなどを販売する記念品店を営んでいました。吉川さんが書いた本「『原爆一号』といわれて」や中国新聞の記事を読み、どんな思いだったかを調べました。

被爆者の故吉川さん

ドーム近くで 絵はがき販売

被爆した吉川さんは入院中、背中のケロイドを見た米国人記者が叫んだ言葉から、「原爆１号」と呼ばれました。退院後は職探しに苦労しましたが、人に勧められて記念品店を始めました。初日は250円の売り上げ。米や野菜を買って被爆後、初めておなかいっぱい食べたそうです。

観光客にケロイドを見せ、原爆の悲惨さを訴えました。「原爆を売り物にしている」と批判も受けましたが、「（原爆を）売りまくって核をのろうのだ」と反論しました。吉川さんは広島では初の被爆者組織を結成し、被爆者運動に積極的に取り組んだことでも知られていました。戦後間もない時代を必死で生き抜いた吉川さんにたくましさを感じました。（高１目黒美貴）

次回は２月21日に掲載します。ジュニアライターが取材後の感想をつづった「編集後記」を、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイト（http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=89022）にアップします。